

と言つて病氣の子供にお粥を、本当に有難いお心づくし、感謝のほかありません。

内地の山が薄く見えてきました。船の中は喜びでたいへんです。祖国の岸です。長男の手を握り、嬉しきで涙を流しっぱなしでした。

七月二日、博多港に上陸、あの感激は今も昨日のように思われます。婦人会の方々から海草の入った大きなおにぎりを一個ずつ頂きました。船路を共にした皆様とそれぞれ県別に分かれ、割当てられたお寺に一泊、七月四日夕方、主人の実家にたどり着きました。

当時の姿は前に一人、背中一人、長男は荷物を下げ、袋の中味のたいせつなもの、やかん、洗面器、薬、次の日からたいへんです。両親と妹の三人暮しの中に、親子四人加わって七人家族、食べ物になりますと、水増しという言葉どおり薄くのばすわけです。

私も百姓仕事に息たえだえですが、夫の生きて帰る日を待ち続けていることが生き甲斐の日々、前進の日々と、けんめいにかんばりました。

夫は、昭和二十年八月十四日戦死、昭和三十年十月

二十五日に公報の伝達を受けました。県庁より遺骨を受け、多賀駅に降りますと、主人の父が白い箱にすがり、悲しみの涙を見せた時、親であるかぎり、かけがえのない息子を待ち続けていらしたことを目の前で知り、私は倒れそうになってよろめいたことを今もおぼえております。

私の逃避行

滋賀県 廣田 きみ

二十年八月九日ソ連参戦。その夜、当時住んでいた、新京市のがが家へ隣組を通じて、突如疎開命令を受けた。ソ連兵がそこまできている。女子供はじまになるのですぐに立ち退くよう、ただし男子は最後まで新京を守るべく、動かないようにとの厳命であった。戦争末期でありながら、空襲のおそろしさも知らずあんがいのんきに銃後を守っていた私共の驚き、地に足がつかないまま取り急ぎ、おしめ、水筒、ミルク、毛布

等必需品をとりまとめ、深夜指定された児玉公園へ集結した。

十か月の赤ん坊を背に、三歳の女兒の手を引き、荷物は片方の手にしか抱えられなかった。翌朝早くバスで新京駅へ送られ、乗車、行先は不明のまま。汽車に揺られ、三日ほどして鴨緑江を渡る、不安に怯える私共がようやく降された町は定州、(平壤の北の方に位置する)そこで一年間も軟禁生活を強いられるとは夢にも思わなかった。

朝夕一個ずつの小さなおにぎりと、うすい塩汁後は水だけで露命をつないだ一年間、栄養失調のどん底であった。表玄関と裏口は朝鮮の保安官が立ち、出入の自由はない。その中で仕事もなのまま、暖房の無い部屋で猿の母子のように肌を合わせて温みをとる姿、怨んでも、怒っても、そこからは脱出することはできなかった。病気をすればなおらない。弱い人はそれに負けて数多くの方が亡くなられた。

初め六畳部屋に九家族二十三人が収容された。頭を鉢合せ、横向きのまま二列に並んで寝る。もちろん寝

返りはできない。

隣の女兒が亡くなった。お線香のすぐ傍で瀕死の妹が苦しんでいる。その横で娘さんが歌を歌う。この世の地獄であった。人の死が日常茶飯事になっていた。

二月四日、妹が死んだ。農家から供出のワラを綿代りに仕立てたふとんを使っていたが、人間死んでもすぐに埋葬出来ず、七、八人集まった頃に遺体を山へ連れて行ける。雪は深いし、道が遠いので遺族は行けない。埋葬までの間、そのまま寝かされる。遺体と一緒に寝た。恐ろしいとか気味が悪いとは感じず、ただ冷たいので夜中寒くて困った。

春の訪れと共に本部で商品を貸出し、私共に石鹼等の行商が許される。親切な朝鮮の小母さんからときどき銀めしを御馳走になる。とても嬉しい日もあった。何とか精神的には少し余裕もできた。

部屋の方達とはすっかり仲良くなって、おたがいはげましあい助け合って毎日を楽しく暮す。夜は電灯がないので、日暮れまでに床に入る。夜長の話は食べることばかり。

しかし、いつまでこの生活が続くのか、一日延びる毎に体力が落ちる。風呂へも入れない。日本へ帰りたいが、いつのことやら、心身共に極限まで来た。新聞、ラジオがないのでいろいろとデマが飛ぶ。北緯三十八度に線が引かれてそこを突破しないと帰れないことがわかってきた。

そこへ入った朗報、奥地から日本人が移動をはじめ、定州駅から南下しているとのこと、私共が奥地の人達に混ざって、こっそり脱出することにきまつたという。

この収容所から五十人ずつ夜陰にまぎれて出発という。順番は子供の多い人と、単身者、第一陣が出た後は毎日毎日廊下に立ち、自分が呼ばれるのを待った。

くしくも新京を発つて丸一年、二十一年八月十日、老若を問わず一人一升五合のお米をもらい、唯一の財産ある娘の手を引いて、飯盒、ミルクパン、当時の全財産、(お金は無銭)を持ち、リーダーの男性に導かれて収容所を出発、駅まで真つ暗な道を一言も話さず黙々と歩いた。途中保安官に呼びとめられ「タレカ、セキニンシヤ、タレカ」の声に怯えながら、帰れる嬉し

さと、今ここで引き戻されたらの不安を胸に電灯一つない真の闇を全員無事、駅までたどり着いた。

終戦から故郷の土を踏むまで

兵庫県 樋口 匡

昭和二十年八月十五日、私は各女学校に軍衣袴の縫製指導員として巡回、母校の神明高女で臨時ニュースを聞き、目先真暗、大きな衝撃を受けて帰隊、私物整理、除隊準備等で皆隊内を走りまわった。

私の家は隊に近いのでソ連にすべてを引渡すために、残務整理、隊員の食事の世話を頼まれ、一週間目に、明日十時にソ連兵が来隊するから朝食まで帰宅するように言われ、隊員と最後の別離となった。

高齢の両親と女学校を卒業したばかりの妹、昨日まで米一升が何円かも知らずに暮してきた私は父に代り、大黒柱の役目を果たさねばならぬ立場になった。

新京の長兄、次兄家族とは音信不通、日本の土を踏